

# 「落ちない大石」を 地域活性化の 起爆剤に

寸又峡外森神社にある「落ちない大石」その昔、天狗が降り立ったという言い伝えがあるこの岩を活用して地域づくりの起爆剤にと考えた人たちがいます



## 「落ちない大石」とは

寸又峡温泉街を奥に進んでいくと、紅竹食堂を超えてすぐ右側に鳥居と参道が現れる。この参道の入口付近には絵馬がかけられ「合格祈願」「旅の無事」「家内安全」などの願いが書かれている。参道を歩き階段を登っていくと、やがて左手に見えてくるのが「落ちない大石」だ。高さ7、8メートルはあろうかという巨大な石が、山腹に絶妙なバランスで立っている。「よく落ちないなあ」と誰もが首をかしげる。

この石には、古くからの言い伝えがある(左上①参照)。この言い伝えを知ってから、もう一度石を眺めてみると、何となく手を合わせたくなってしまいうか不思議だ。

## 落ちない大石を活用して

寸又峡美女づくりの湯観光事業協同組合と中部電力(株)大井川電力センターとが共催して12月7日、「落ちない大石・緑日」を初めて開催した。企画の成功と無事を願い、同日午前11時から石の前で祈願祭が執り行われた。

祈願祭には組合員や中部電力職員、観光協会、観光客らが参列。神事は滞りなく進行した。式後、望月孝之理事長は「その昔、天狗が五穀を外森山に落としたことで、この地域ができたという言い伝えが残っている大石です。安政の大地震でも落ちなかったといわれ、この地域の守り神ともいえるべき存在です。昨年から中部電力の協力で、地域の活性化策と一緒に考え、実行してきました。これからも大勢の人が力を合わせ、この地域の守り神であるこの石を、わたしたちの手で守っていききたい」と思いを語った。

寸又峡美女づくりの湯観光事業協同組合 望月孝之 理事長



## ①「天狗の落ちない大石」

寸又川の源流部、南アルプスの最先端(光岳)には、山頂付近に白く光る物体があるといわれ、人々の間では「天狗の威光」だと語り継がれてきました。

あるとき光岳の天狗は2人の山伏(黒法師・前黒法師)を伴って、大間(寸又峡)の集落に向かいました。大間の小高い杜にある大きな石の上から辺りを見渡すと、そこは畑も食べ物も極端に少ない、寒々とした場所でした。

そこで天狗は、大年神(穀物の神)を天界から呼び、麦、ひえ、あわ、きび、豆の「五穀」を持参するようお願いしました。やがて袋いっぱい穀物が、天狗の元に届けられました。それを大きな石の上にあけると、山のように盛られた五穀は、杜の外にまであふれて広がったといいます。

この場所は「外森山」と名付けられました。天狗が上ったとされる巨大な石は、断崖に何百年もとどまり続けることから「落ちない大石」と呼ばれるようになりました。村人たちはこの石を、霊験あらたかなご神体として、あがめ奉るようになったのです。

現在では、大学、高校、中学をはじめ、就職、運転免許、資格試験などの受験者や、高層建築で働く職人、塗装工、大工、植木職人など「落ちてはならない人」の守り神として祭られています。

く内外に知ってもらうことで、地域の元気づくりにつながると信じています」と熱く語った。同日、温泉街のメインストリート上に小規模ながら緑日が登場。絵馬やストラップ、だるまなどの安全祈願グッズの販売や観光パンフの配布などを実施した。その隣では観光客に甘酒が振る舞われ、道行く人たちの心と体を温めた。

この緑日は、受験や就職シー

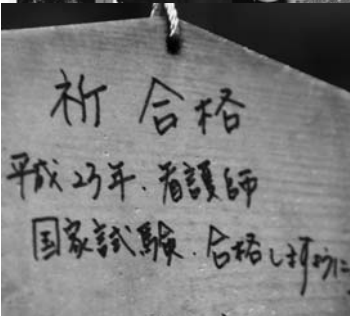
ズンに合わせ、12-3月の、いずれも7日に開く予定だ。かけられた絵馬を見ると、東京都や京都府など県外から訪れ、絵馬に書き込んでいる人が多いことが分かる。今はまだ、観光のついでに大石を見て、絵馬を書くのが一般的だ。だが、大石に願をかけるために人が訪れるようになるかもしれない。そんな夢がふくらんでいく。

## 温泉の湧出に感謝を込めて

寸又峡温泉では昭和32年の温泉湧出に感謝を込めて12月6、7日の両日「温泉供養祭・感謝祭」を開催しました。午後7時過ぎ、松明を先頭に温泉街を練り歩いた天狗・山伏行列が寸又峡イベント広場に到着すると、大勢の来場者が拍手で出迎えました。天狗が明りに火を灯すと感謝祭がスタート。厳かなムードが一転、にぎやかな雰囲気になりました。

ステージでは、赤石太鼓や中部電力アマチュアバンドによる演奏が会場を盛り上げました。バンド演奏の後に開かれた大声コンテストは、他市町からの来場者や小さな女の子など8人が参加。「おじいちゃん大好き!」など、おのおのメッセージを込めた大声を張り上げ、来場者からは大きなかけ声が飛んでいました。

場内には、猪鍋、熊鍋、鹿鍋、そばなどの味覚が並び、来場者の舌を楽しませました。催しの最後は、温泉の湧出に感謝の気持ちを込めた餅つき。できたての餅が来場者にふるまわれました。



厳かに執り行われた祈願祭

緑日には観光客をもてなした

絵馬を見つめる女性たち

合格を祈願した絵馬

一つをやり遂げても「ゴール」ではない。そこから新たなスタート。やりたいことは無限にある。

中部電力(株)大井川電力センター 寺本達也 所長

検討したのち、地元組合の皆さんに提案を持ちかけました。その後、皆さんと協力しながら「落ちない大石の看板製作」「絵馬かけの設置」「参道の整備・階段設置」などを実施しました。多くの人が手を組むことで、少しずつ前に進んできました。

やりたいことは、まだまだありません。ここからまた新たなスタートです。一過性では終わらない「この地域ならではの」を追求していきたいと考えています。

「寸又峡温泉を訪れた観光客が、温泉以外にも楽しめることはないか」。約1年前、本町の活性化のため、わたしたちができることを検討する「地域活性化プロジェクトチーム」を社内に3つ立ち上げました。寸又峡チームでは、この地域の言い伝えである「落ちない大石」に着目しました。「こんなに優れた素材が埋もれていたんだ」と気付くと同時に、外の人には全然知られていないという現状も実感したためです。

チーム内でさまざまな活性化策を